Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 一側性難聴のある人の経験 |
| Author(s) | 渡邊, のどか; 楊, 玉春; 髙橋, 慧 他 |
| Citation | 大阪大学看護学雑誌. 2024, 30(1), p. 1-11 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/94624 |
| rights | ©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学看護学雑誌 Vol.30 No.1（2024）

# 一側性難聴のある人の経験

Experiences of People with Unilateral Hearing Loss

渡邊のどか[1)]・楊玉春[2)]・髙橋慧[2)]・清水安子[2)]

Nodoka Watanabe[1)], Yuchun Yang[2)], Kei Takahashi[2)], Yasuko Shimizu[2)]

## 要　旨

本研究の目的は一側性難聴のある人の経験を明らかにし、医療従事者としての支援の在り方について示唆を得ることである。一側性難聴のある成人を対象に、半構造化面接を行った。面接内容は逐語録としてデータとした。参加者は4名で全員20代、女性2名、男性2名であった。分析の結果、【コミュニケーションで困った経験と対処】、【一側性難聴であることへの認識】、【一側性難聴について他人の認識の受け止め】、【周囲への一側性難聴についての開示】、【周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮】、【同じ境遇の人の経験を知る】、【一側性難聴の経験からの学びや人生選択】の7つの側面が明らかになった。この結果から、一側性難聴のある人はコミュニケーション等で困った経験をもっており、一見障害がないようにみえる状況であっても、周りのさりげない配慮がコミュニケーション等、円滑な人間関係の構築につながると考えられた。同時に、一側性難聴であることへの認識は様々であり、それぞれの認識に配慮しながら、関わることが重要であると考える。

キーワード：一側性難聴、経験、コミュニケーション、配慮

Keywords: unilateral hearing loss, experiences, communication, consideration

## Ⅰ．緒言

一側性難聴（Unilateral Hearing Loss UHL）とは、片側の耳は正常で対側の耳に軽度以上の難聴がある状態と定義されている[1)]。国内では、全出生児のうち先天性一側性難聴の発症率は 0.09％であったとする調査結果がある[2)]。新生児聴覚スクリーニング検査の普及に伴い、早期に診断されるようになり、新生児聴覚スクリーニングによる診断率は26.7%であった[3)]。一側性難聴の主たる原因として内耳・内耳道奇形，ムンプス難聴，先天性サイトメガロウイルス感染症があげられ、その他髄膜炎、Auditory Neuropathy Spectrum Disorder、内リンパ水腫があるが、半数以上は原因不明である[4)]。

一側性難聴は、両耳聴効果が失われることによって両耳加重効果、両耳スケルチ効果、頭部遮蔽効果などが失われ、主に難聴側からの聴取困難、騒音下での聴取困難、音源定位の困難に集約されると報告されている[4)]。

片耳難聴児の実態調査では、難聴発見の年齢に関わらず、問題が顕在化するまで支援を受けていないケースがあることが指摘されている[5)]。片耳難聴の機能障害は、社会性、学習、仕事の生産性に大きな影響を与えると指摘された[6)]。一側性難聴者に適合できる補聴器としてはクロス補聴器（CROS: Contralateral Routing of Signals 先天性・後天性を問わず、片耳難聴および聴力の左右差が大きい方に有効な補聴器である）が知られているが、両耳に装用する必要があり実際に装用している人は多くはない[7)]。本邦での公的支援として、徳島県では、一側性高度難聴児に対して、無線式補聴援助システム（教師が装着した送信機から一側性高度難聴児の健聴耳に装用した受信機に教師の声を、電波を伝えて聞かせるもの）を使用す

1) 大阪大学医学部附属病院看護部（前大阪大学医学部保健学科）、2) 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

1) Department of Nursing, Osaka University Hospital, (Former Osaka University Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences) 2) Osaka University Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences

るように勧め、その際には、購入費助成制度が利用できる制度もある[8]。補聴器使用者と補聴器未使用の小児の聴力への注意と聴力の質の比較に関する研究では、補聴器を使っていない一側性難聴者の聴覚的注意の分割に関して、聴こえの質が低いことを明らかにし、一側性難聴児に早期の聴覚リハビリテーションの必要性が示唆されている[9]。しかし、国内においては依然、片耳で聴取可能であることから日常生活や言語発達において支障がないとの考えが根強く、一側性難聴者に対する支援は乏しい状況にあると岡野[10]は指摘している。

新生児聴覚スクリーニング検査により新生児期に診断を受けた養育者は、情報不足により将来の見通しが持てず、育児に不安を抱えていることが少なくない[11-12]。一側性難聴者は、身体障害者手帳の交付対象ではなく、支援の対象としての認識が十分ではないため、養育者への情報提供や障害理解に関わる医療・療育・教育支援の体制は十分とはいえない[13]。養育者の一側性難聴に対する理解が一側性難聴者の障害観の形成に影響している[14]との結果もあり、一側性難聴者や養育者に対し、適切な情報提供が必要であると考えられる。適切な情報提供を行うには、一側性難聴者が、どのような経験をして、どのような支援を求めているかを明らかにする必要があると考えた。そこで、本研究の目的は、一側性難聴者のある人の経験を明らかにし、医療従事者としての支援の在り方について示唆を得ることとした。

## Ⅱ．研究方法

### 1. 用語の定義

経験：一側性難聴にまつわる出来事、行動、思い、気持ち。

### 2. 研究デザイン

質的記述的研究

### 3. 研究参加者

先天性一側性難聴、または、就学前までに一側性難聴になり、研究協力の同意が得られた者とした。

### 4. データ収集方法

1）参加者のリクルート方法

機縁法での依頼に加え、一側性難聴のコミュニティ（片耳難聴を持つ人の当事者組織）の交流会での依頼を行った。

2）調査方法および調査内容

参加者に、一側性難聴で困ったこと、悩んだこと、また、印象に残っている出来事や経験、および求める支援などについてインタビューガイドを用いて半構成的面接調査を実施した。面接場所は、参加者の希望に応じて、対面またはオンラインとし、プライバシーを考慮した環境で実施した。面接時は、参加者の許可を得て、IC レコーダーあるいは ZOOM の録音機能を使用して録音し、逐語録としてデータとした。

また、面接前に参加者の背景を把握するために、質問票を通じて、年齢、性別、一側性難聴の発見時期、判明した経緯、発病の原因について回答してもらった。

3）調査期間

調査期間は 2022 年 9 月～10 月であった。

### 5. データ分析方法

質的帰納法で分析した。逐語録を繰り返し読み、全体の意味を捉え、文章の意味が読み取れる単位を分析単位とし、意味内容を変えないよう最小単位の文節でコード化した。コード化したものを意味内容の類似性および同質性に基づき、小カテゴリーを抽出・命名した。小カテゴリーから共通する文脈を見出し、中カテゴリーを生成・命名し、さらに中カテゴリーを経験の事柄で分類し、大カテゴリーを生成・命名し、一側性難聴のある人の経験と求める支援を考察した。

### 6. 妥当性と真実性の確保

データ収集、分析の一連の段階において、質的研究に精通した研究者複数名からの指導を受け、妥当性と真実性の確保に努めた。

### 7. 倫理的配慮

参加者に研究の趣旨と方法、研究目的以外には収集したデータを一切使用しないこと、個人情報は保護されること、研究の参加不参加によって不利益を被ることがないこと等を説明し、書面にて研究参加の同意を得た。その後、インタビューの際には、許可を得て IC レコーダーあるいは ZOOM の録音機能を使用して録音した。大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認（承認番号 22218）のもと行った。

## Ⅲ．結果

### 1. 研究参加者の概要

参加者は 4 名、年齢は 20 代であった。参加者の概要は表 1 に示す。参加者への平均面接時間は、69.3 分であった。

**2. 一側性難聴のある人の経験**

一側性難聴のある人の経験は、7 つの大カテゴリー、29 の中カテゴリー、65 の小カテゴリーを生成した。以下【　】を大カテゴリー、≪　≫を中カテゴリーとして表記する。（表 2）

【コミュニケーションで困った経験と対処】の中には、≪コミュニケーションがうまくいかない時がある≫、≪コミュニケーションがうまくいかないことから人間関係や仕事に影響が出る≫、≪自分で対処する≫、≪配慮を求める≫と 4 つの中カテゴリーが含まれた。

【一側性難聴であることへの認識】の中には、≪自分にとってはこれが普通≫、≪自分自身が困っていたことが一側性難聴によるものだと後からわかる≫、≪コンプレックスや劣等感がある≫、≪気にしすぎないようにしている≫、≪自分の個性であり、特別なことではなく、しょうがないと思う≫と 5 つの中カテゴリーが含まれた。

【一側性難聴について他人の認識の受け止め】の中には、≪周囲の人にどう認識されているか分からない≫、≪他の人にはわからない≫、≪周りの目は気にしていない≫と 3 つの中カテゴリーが含まれた。

【周囲への一側性難聴についての開示】の中には、≪周囲の人に伝える≫、≪隠すことでもないと思い伝える≫、≪メリットがあると思い伝える≫、≪伝えるかどうかやタイミングで悩む≫、≪周囲に伝えていない≫、≪デメリットと思い伝えない≫、≪親との会話で話題に上がることがほとんどない≫の 7 つの中カテゴリーが含まれた。

【周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮】の中には、≪伝えたけれど配慮がなかった≫、≪学校での聞き取りやすくするための配慮≫、≪親からの配慮や助言≫、≪配慮が嬉しかった≫、≪周囲に求める配慮≫、≪普通に接してほしい≫と 6 つの中カテゴリーが含まれた。

【同じ境遇の人の経験を知る】の中には、≪同じ境遇の人と経験が共有でき、共感できた≫、≪同じ境遇の人が意外といることを知り、特別なことではないと思えた≫と 2 つの中カテゴリーが含まれた。

【一側性難聴の経験からの学びや人生選択】の中には、≪一側性難聴であることを踏まえて進路を模索する≫、≪一側性難聴での経験から得られた学び≫と 2 つの中カテゴリーが含まれた。

## Ⅳ. 考察

本研究の目的は、一側性難聴のある人の経験を明らかにし、医療従事者として支援の在り方の示唆を得ることである。参加者の経験として、7 つの大カテゴリーが明らかとなった。これらの結果に基づいて、コミュニケーションで困った経験、一側性難聴の受け止め、周りに求める支援、一側性難聴の意味合いについて考察する。

**1. コミュニケーションで困った経験**

大カテゴリー【コミュニケーションで困った経験と対処】の結果を踏まえて、一側性難聴者のコミュニケーションでの困った経験について考察する。

難聴側からの聴取困難や騒音の中に聞き取りづらいことは、先行研究の結果[14-16]と一致していた。特に、本研究では〈マスクをつけていると分かりづらい〉という困難を抱えていることが分かった。コロナ禍でマスクを付けていることによって、視覚情報から会話の情報を得ることが難しく、一側性難聴者にとっても視覚情報も重要であると示していると考える。また、聞き取れないことによって誤解を招いたり、仕事が進まなかったりなど日常生活に支障をもたらしていることが明らかになった。特に就職して他人より聞こえにくいと認識したことで、試行錯誤しながら対処している様子が浮かびあがった。先行研究では、一側性難聴により就職活動の失敗や職業選択の制限が指摘されていた[14]。このことから、学生時代と比較し、就職後、職業や職場環境によってはトラブルになる可能性が高いと考える。岡野ら[14]が指摘したように、社会人以降に情報の高次化に伴い、聴取場面が複雑化し、問題が顕在化しやすいと言える。学生時代に問題なく対応できていたとしても、その時になって、慌てることなく対応できるように、その後の社会生活を見据えて事前に準備できるような支援が必要なのではないか。

一側性難聴への対処方法としては、聞き取りやすい位置を確保し、もう一度言ってもらったり、予測して行動していることが明らかになった。何度も聞き返せない時の対処として、聞き流したり、聞こえていないふりをしたりなどが明らかになった。岡野ら[17]の研究では、8 割以上の人は何度も聞き返し、9 割以上の人は聞こえたふりをすることが明らかになっている。参加者の対処方法は、岡野ら[17]の研究結果と類似していた。また、聞

表 1．対象者の概要

| | 年齢 | 性別 | 難聴耳 | 発覚した年齢 | 原因 | 職業 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A 氏 | 20 代前半 | 男性 | 右 | 先天性 | 不明 | 学生 |
| B 氏 | 20 代前半 | 女性 | 右 | 就学前ではあったが何歳だったかは覚えていない | ムンプスの疑い | 学生 |
| C 氏 | 20 代前半 | 女性 | 左 | 先天性 | 小耳症 | 学生 |
| D 氏 | 20 代後半 | 男性 | 左 | 6 歳 | 不明 | 社会人 |

表 2．一側性難聴に関する経験

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー |
|---|---|---|
| コミュニケーションで困った経験と対処 | コミュニケーションがうまくいかない時がある | 難聴側から話されると聞き取りづらい<br>騒音の中だと聞き取りづらい<br>多人数の会話で苦労する<br>ペアワークがやりづらく困った<br>イヤホンをつけると周りの音が聞こえない<br>マスクをつけていると分かりづらい |
| | コミュニケーションがうまくいかないことから人間関係や仕事に影響が出る | 聞き取れなかったことで誤解を招いた<br>聞き取りなかった部分を曖昧にして仕事をしないように指導された<br>就職して他人より聞こえにくいっていうことを再認識し大きな壁だと感じた |
| | 自分で対処する | 聞き取れなくても聞き流したり、聞こえていないふりをしたりする<br>聞き取りづらかった部分を予測して行動する<br>聞こえやすい座席や立ち位置を自分で選ぶ |
| | 配慮を求める | もう一度言ってと伝える<br>聞こえやすい位置にいてもらうように伝える |
| 一側性難聴であることへの認識 | 自分にとってはこれが普通 | 生まれつきなので対処も身についており、普通に暮らしている(いた)<br>普段はほとんど問題ないはないがたまに困る<br>周囲に指摘されたこともなく、自然に振舞える自信がある |
| | 自分自身が困っていたことが一側性難聴によるものだと後からわかる | 両耳がどう聞こえているのか分からない<br>自分自身がどう困っている(いた)のか分からない<br>話しやすいと感じた環境 |
| | コンプレックスや劣等感がある | 耳をコンプレックスや劣等感と捉えて悩んだり落ち込んだりすることもある(あった)<br>落ち込んでいる時やうまくいかないことがあった時、耳のせいにしてしまう |
| | 気にしすぎないようにしている | 気にしすぎないようにしている |
| | 自分の個性であり、特別なことではなく、しょうがないと思う | アイデンティティ・個性と思っている<br>特別なことや障害とは捉えておらず、しょうがないことだと思っている |
| 一側性難聴について他人の認識の受け止め | 周囲の人にどう認識されているか分からない | どう思われているか分からない |
| | 他の人にはわからない | 片耳の状況が他の人には伝わらない |
| | 周りの目は気にしていない | 自分が気にしているほど、他人は気にしていない<br>偏見の目で見られることはないと思う |
| 周囲への一側性難聴についての開示 | 周囲の人に伝える | 伝える人を選んで伝えている<br>オープンに周りに伝えている<br>聞こえづらい場面で伝える<br>新しい環境で最初に伝える<br>上司に伝え方を相談して伝える<br>自分で伝えるのにはエネルギーがいる |
| | 隠すことでもないと思い伝える | 別に悪いことでも隠すことでもないと思うようになり伝える |
| | メリットがあると思い伝える | 知ってもらうとコミュニケーションが円滑に進み、自分も楽で伝える |
| | 伝えるかどうかやタイミングで悩む | 伝えるかどうか、伝えるタイミングに悩む |

| | | |
|---|---|---|
| | 周囲に伝えていない | 周囲に伝えていない<br>耳の奇形を髪で隠す |
| | デメリットと思い伝えない | 身体的欠点・弱みだと捉えており伝えない<br>普通に生活できるので、周囲に気を遣わせるのが申し訳なくて伝えない |
| | 親との会話で話題に上がることがほとんどない | 親との会話で話題に上がることがほとんどない |
| 周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮 | 伝えたけれど配慮がなかった | 伝えても忘れられる<br>聞き返しても、もう一回言ってもらえなかった<br>学校にはとりあえず伝えていた |
| | 学校での聞き取りやすくするための配慮 | はきはきとした声で授業してくれると聞き取りやすい<br>授業で、資料など視覚情報の補助があると助かる<br>受験時、英語のリスニングでイヤホンや座席を配慮してもらえた |
| | 親からの配慮や助言 | 病院などに付き添ってくれて、心配してくれた<br>困りごとがないか聞かれた<br>健聴側の耳を大切にするよう言われた |
| | 配慮が嬉しかった | さりげなく聞こえやすい位置を配慮してくれた<br>知ってもらうだけで嬉しい<br>配慮してくれることで思いやりがある人だと思う |
| | 周囲に求める配慮 | 大きな声で話してほしい<br>聞こえやすいほうに移動してほしい<br>みんな人に頼って生きているから頼っていいと思えるようになった |
| | 普通に接してほしい | 特別扱いではなく、一側性難聴を少し心にとどめて普通に接してほしい<br>過剰反応されたくないし（メガネのように）フランクに捉えてほしい |
| 同じ境遇の人の経験を知る | 同じ境遇の人と経験が共有でき、共感できた | 同じ境遇の人と経験が共有でき、共感できた |
| | 同じ境遇の人が意外といることを知り、特別なことではないと思えた | 同じ境遇の人が意外といることを知り、特別なことではないと思えた |
| 一側性難聴の経験からの学びや人生選択 | 一側性難聴であることを踏まえて進路を模索する | 一側性難聴であることを踏まえて進路を模索する |
| | 一側性難聴での経験から得られた学び | 普通に接してくれたからこそ自分の周りへの配慮の足りなさに気づいた<br>健聴・難聴関係なく、伝えようとすること・聞こうとすることが大切であると気づいた |

き取りやすい位置を確保すると対処していたが、岡野ら[14]が指摘していたように、社会人の飲み会の場合は、上座・下座といった座席を選べない場面もあり、聴取困難の状況は、複雑化していく傾向があると考える。

**2. 一側性難聴の受け止め**

大カテゴリー【一側性難聴であることへの認識】、【一側性難聴について他人の認識の受け止め】の結果を踏まえて一側性難聴の受け止めについて考察する。

今回の研究参加者は、全員就学前に一側性難聴になったため、≪自分にとってはこれが普通≫であるという認識を持っており、両耳で聞くという経験がこれまでないため、≪自分自身が困っていたことが一側性難聴によるものだと後からわかる≫という経験をしていた。一側性難聴による障害には、音源定位の困難があり、先行研究でも指摘がある[18]。まったく聞こえていないわけではないという一側性難聴だからこそ、例えば、音の方向が分からなくても、≪自分にとってはこれが普通≫であり、幼少期には、自分で気づきにくいという特徴が示されたと考える。また、先行研究により一側性難聴の子をもつ養育者は、一側性難聴に対しての情報が不足し、親たちは難聴、聴覚障害、介入の選択肢について、さらに詳しい情報が必要と述べていた[12]。この時に、医療従事者としては、養育者や当事者に一側性難聴の特徴や日常生活で工夫できることを助言することが必要であると考える。しかし、一側性難聴者にとって≪自分にとってはこれが普通≫という認識を持っている場合もあることを念頭におきながら助言することが必要である。

一側性難聴であることへの認識は、変化することがあり、認識の変化の時期や内容はそれぞれであった。このことから、一側性難聴に対しての自己認識は、一側性難聴者によって異なり、また時間や成長に伴い自己認識が変化していることが分かった。参加者の一側性難聴への認識は、岡野ら[13]の研究結果と類似し、障害認識の経緯は、多様であることが示された。また、＜特別なことや

障害とは捉えておらず、しょうがないことだと思っている＞人もいた。このことから、一側性難聴が、障害だと認められてはいないが、時々困る経験をしているという曖昧な状態にいることは、共通する特徴であると考えられる。その為、“障害者である”あるいは“健常者である”と画一的に決めつけず、その人が経験している困りごとに対応することが求められる。

**3. 周りに求める支援について**

大カテゴリー【周囲への一側性難聴についての開示】、【周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮】、【同じ境遇の人の経験を知る】の結果に基づいて周りに求める支援について考察する。

一側性難聴の自己開示に関して、周囲に伝える人と伝えない人がおり、それぞれの理由がある。この結果は、岡野ら[17]の量的研究結果と一致していた。一側性難聴者の自己開示により、学校の先生がはきはきした声で話してくれる、視覚資料を提示してくれる、受験時座席を調整してくれるなどの配慮を経験したことによる嬉しい思いがあった。このことから、一側性難聴者には、上記のような配慮が必要であると考える。養護教諭や保健師は、学校の先生や保護者に対し一側性難聴者への配慮方法を指導、助言していく必要があると考える。その一方で、配慮してほしい気持ちがあるが、過剰反応されたくない、偏見なく捉えてほしいという思いもあった。このことから周りのさりげない配慮が、コミュニケーション等、円滑な人間関係の構築につながると考えられた。

また、同じ境遇の人と経験を共有、共感し、一側性難聴は、特別なことではないと再認識したことが明らかとなった。このことは、障害者同士が話し合う機会の必要性を示唆した先行結果[19]と一致していた。また、職場では、一側性難聴に関する理解が必要である。一側性難聴であることを開示している場合は、職場では状況に応じた適切で、合理的な配慮が必要であるとも考えられる。

**4. 一側性難聴の意味合い**

大カテゴリー【一側性難聴の経験からの学びや人生選択】の結果に基づいて一側性難聴の意味合いについて考察する。

参加者の何人かは、健聴・難聴関係なく、伝えようとすること・聞こうとすることが、大切であると気づいたと述べた。この結果は、本研究のオリジナルの結果ではないかと考える。参加者は、自分の一側性難聴による聞き取りしづらいという特徴から、聞こうとする態度の大事さに気づいて、自身の人間的成長につなげていると考える。参加者は、一側性難聴がもたらす困難というネガティブな面だけではなく、それを糧にする姿勢を示した。このように、一側性難聴のある人にとっての強みとなり得る側面もあることを支援者は認識する必要がある。

**5. 看護への示唆**

医療従事者としては、一側性難聴で困る場面（難聴側からの聴取困難や騒音の中の聴取困難、音源定位困難）を知っておくことが重要である。また、はきはきとした声は、一側性難聴をもつ人にとって聞き取りやすいため、一側性難聴者が、他の病気で医療機関の受診時に、はきはきとした声でコミュニケーションを取ることを勧める。学校に通う一側性難聴者は、学校側に伝え、必要であれば、席の配慮をしてもらったり、視覚的情報を増やしてもらったりすることを求めることができる。幼少期発症した場合は、自分がどうのように困っているかを認識することが難しいため、医療従事者として、一側性難聴者や保護者に一側性難聴の特徴や日常生活の中で工夫できることを提言することが必要と考える。その一方で、支援の際には、本人の一側性難聴への認識に配慮しながら、対応することも重要であると考える。

**6. 本研究の限界と今後の課題**

本研究は、4 名の一側性難聴者を対象としたインタビュー調査から分析したものであるが、一側性難聴を持つ人の日常生活における経験を明らかにし、一側性難聴に対する認識を深めたと考える。しかし、参加者は、全員が 20 代であり、これらの結果は、他の年齢層の方に適応していない可能性がある。今後は、結果の妥当性、信頼性を高めるために、より幅広く一側性難聴者を対象とし、更なるデータ収集が必要であると考えられる。

## Ⅴ．結語

分析の結果、【コミュニケーションで困った経験と対処】、【一側性難聴であることへの認識】、【一側性難聴について他人の認識の受け止め】、【周囲への一側性難聴についての開示】、【周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮】、【同じ境遇の人の経験を知る】、【一側性難聴の経験からの学びや人生選択】の 7 つの側面が明らかになった。

一側性難聴者は、コミュニケーション等で困った経験をもっており、一見障害がないように見え

る状況であっても、周りのさりげない配慮がコミュニケーション等、円滑な人間関係の構築に繋がると考えられた。同時に、一側性難聴であることへの認識は、様々であり、それぞれの認識に配慮しながら、関わることが重要であると考える。

**謝辞**

本研究の実施にあたり、ご多忙の中、貴重な経験についてお話くださいました参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

**利益相反**

本研究には開示すべき COI 状態はない。

**文献**

1) American Speech-Language-Hearing Association (2023): Unilateral Hearing Loss. https://www.asha.org/public/hearing/unilateral-hearing-loss/#:~:text=Unilateral%20hearing%20loss%20(UHL)%20means,school%2Dage%20children%20have%20UHL.（参照 2023-8-11）
2) 白根美帆, 牛迫泰明, 山本麻代 他（2015）：先天性一側性難聴乳幼児の実態に関する検討, Audiology Japan, 58,182-188.
3) 増田佐和子, 臼井智子（2007）：小児一側性難聴の検討, 耳鼻臨床, 100（1）, 9-15.
4) 岩崎聡（2013）：聴覚に関わる社会医学的諸問題「一側性難聴の臨床的諸問題」, Audiology Japan, 56,261-268.
5) 桑原桂, 佐藤隆子（2020）：新潟県の難聴通級指導教室, 難聴特別支援学級及び聴覚特別支援学校における片耳難聴児の実態, Audiology Japan, 63,525-530.
6) Snapp, H. A., & Ausili, S. A. (2020): Hearing with One Ear: Consequences and Treatments for Profound Unilateral Hearing Loss, Journal of clinical medicine, 9(4), 1010. https://doi.org/10.3390/jcm9041010
7) 牧敦子（2018）：耳疾患・聴覚疾患 補聴器を勧めるべきか 一側性難聴と軽度難聴への対応, ENTONI, 223, 22-28.
8) 島田亜紀, 坂本幸, 竹山孝明 他（2022）：一側性難聴が小児の語音聴取能と言語発達に与える影響と聴覚補償の必要性, 耳鼻咽喉科臨床, 補冊 158,98-104.
9) Russo, F. Y., De Seta, D., Orlando, M. P., Ralli, M., Cammeresi, M.G.,Greco, A.,de Vincentiis, M., Ruoppolo,G.,Mancini, P., & Turchetta, R. (2022): Hearing attention and quality of listening in children with unilateral hearing loss with and without hearing aid, Acta otorhinolaryngologica Italica: organo ufficiale della Societa italiana di otorinolaringologia e chirurgia cervico-facciale,42(2),169–175. https://doi.org/10.14639/0392-100X-N1746
10) 岡野由実（2018）：一側性難聴における騒音下聴取と補聴支援に関する文献的検討, 目白大学健康科学研究, 11,25−33.
11) 岡野由実（2018）：一側性難聴児支援と家族への助言 診断期から青年期を展望して, 小児耳鼻咽喉科, 39（3）, 270-274.
12) Grandpierre, V., Fitzpatrick, E. M., Na, E., & Mendonca, O. (2018): School-aged Children with Mild Bilateral and Unilateral Hearing Loss: Parents' Reflections on Services, Experiences, and Outcomes, Journal of deaf studies and deaf education, 23(2), 140–147. https://doi.org/10.1093/deafed/enx049
13) 岡野由実, 廣田栄子（2015）：一側性難聴事例における聞こえの障害と障害認識の経緯に関する検討, Audiology Japan, 58,648-659.
14) 岡野由実, 廣田栄子（2022）：一側性難聴による聞こえの障害場面の発達的変容に関する検討, コミュニケーション障害学, 39, 74-83.
15) 岡野由実, 廣田栄子, 原島恒夫, 北義子（2013）：一側性難聴者の読話の利用および聞こえの自己評価に関する検討, Audiology Japan, 56,91-99.
16) Choi, J. S., Wu, F., Park, S., Friedman, R. A., Kari, E., & Volker, C. C. J. (2021): Factors Associated With Unilateral Hearing Loss and Impact on Communication in US Adults, Otolaryngology--head and neck surgery: official journal of American Academy of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, 165(6), 868–875. https://doi.org/10.1177/0194599821995485
17) 岡野由実, 原島恒夫, 堅田明義（2009）：一側性難聴者の日常生活における聞こえの問題と心理的側面についての調査 ―ソーシャルネットワーキングサービスを利用して― Audiology Japan, 52,195-203.
18) Corbin, N. E., Buss, E., & Leibold, L. J. (2021): Spatial Hearing and Functional Auditory Skills in

Children With Unilateral Hearing Loss, Journal of speech, language, and hearing research, 64(11), 4495–4512.
https://doi.org/10.1044/2021_JSLHR-20-00081

19) 三浦哲（2005）: 一側性難聴による学業成績等への影響に関する文献考察, 北海道教育大学紀要（教育科学編）, 56（1）, 205-211.

**補足資料１** 各カテゴリーに含まれる元データ

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 元データ |
|---|---|---|
| コミュニケーションで困った経験と対処 | コミュニケーションがうまくいかない時がある | *人の話してる声が、内容が、方向によって、音量とかによっては聞きづらかったりする。(D)*<br>*ゲーセンとか体育館とか、ああいう騒音の中でめっちゃ話しづらくないですか。それがあってどうしても苦手意識が。(A)*<br>*今、マスク着けてるっていうのもあって、電車とかでも話しかけられてるのかすら分からない時とかあって。喋ってる？かな？みたいなのがあります。(C)* |
| | コミュニケーションがうまくいかないことから人間関係や仕事に影響が出る | *…就職して、今まで克服してきた部分もあるけど、やっぱり聞こえにくい部分があるなっていうのを再確認して、それに対して、どういうふうに対応していこうかなっていうところを今試行錯誤してる感じですね。(D)* |
| | 自分で対処する | *お客さんとかに。話しかけられたりすると、あ…って最初だけちょっと頑張って聞いたことあるけど、2回3回って聞き返せないから、それ以降は聞こえないふりしてどっか違うところいっちゃいます。(B)*<br>*たまに、……状況とかを予想しながら、たぶんこう話してたんだろうなって勝手に自己解決して行動したりします」。(A)*<br>*困ったことは、まず日常的なことで言ったら、いろんな席の問題で。…4人で外食行くってなったら…結構先陣切って自分が聞こえやすい場所を確保しなきゃいけない。(C)* |
| | 配慮を求める | *聞こえない時に、すみませんっていくのもいいですけど、もう、はっきりと、聞こえませんでしたけど何か？みたいな、ちょっと強気ではないけど、なんか、もっとはっきりと言ったほうがいいというかっていうのを感じたっていうのが一つあって…(D)* |
| 一側性難聴であることへの認識 | 自分にとってはこれが普通 | *生まれつきなので、(聞こえやすい位置に動くのが)結構身についてます、自分で生きてきて。(C)*<br>*逆に両耳がどう聞こえてるのかも知らないし。(B)* |
| | 自分自身が困っていたことが一側性難聴によるものだと後からわかる | *最近気づいたんですけど、高校の時にバスケ部に入ってたんですけど、片耳難聴だとどうしても、ヘイ、パスみたいに言われたときに、音が分かんないじゃないですか、方向が。(A)*<br>*…今までみんなが音を分かってるって知らなくって、私が。(C)* |
| | コンプレックスや劣等感がある | *一番思うのは、自分の中で、弱みみたいな感じで捉えてる部分が大きいなって思って、何かできないことがあった時、片耳難聴のせいだけじゃないのかもしれないんですけど、結構押し付けがちというか、そういう傾向があるなって自分で思ってます。(C)*<br>*…自分の中である種アイデンティティと捉えられてたかなって思うんです。(C)*<br>*今は、僕は障害を持ってるとは思ってなくて、だから、自分の個性というか、これが自分なんだっていう感じですかね。(D)* |
| | 気にしすぎないようにしている | *自分より大変な人もいるってことを考えたりとか、まあ、結局、考えたところで変わらないしなあって思うと気にしすぎてもあれかなとか考えたり。(A)* |
| | 自分の個性であり、特別なことではなく、しょうがないと思う | *「今は、僕は障害を持ってるとは思ってなくて、だから、自分の個性というか、これが自分なんだっていう感じですかね。」(D)* |
| 一側性難聴について他人の認識の受け止め | 周囲の人にどう認識されているか分からない | *どうなんだろう。でも、私がもしそういう人がいたら、その人が気にしてたらどうしようっていう不安にはなります。間違ったこと言わないようにしなきゃっていう。(B)* |
| | 他の人にはわからない | *人にもやっぱり伝わらないし、聞こえないっていう状況どんな感じなんだろうみたいな。横向きで寝たら、周りが静かに聞こえるとかさ。よー寝れるわみたいな。あーもう聞こえへんわみたいな。(D)* |
| | 周りの目は気にしていない | *偏見の目でみるってのはあれですけど、別に片耳難聴でそんなふうに見る人いないと思うし。(A)* |
| 周囲への一側性難聴についての開示 | 周囲の人に伝える | *もともと隠そうって思ってないし、友達じゃなくても普通にこっちから話しかけられたら、まあよっぽど他人者ない限りは。そうなの、実はみたいなくらいで言っちゃうかなって思ってて。(B)*<br>*なるべく自己紹介の時に言っとこうって感じで。(A)*<br>*上の人に、誰か媒介にして、オフィシャルな発言としてオフィシャルなものとして発言、やってもらったほうが、あのーすごい楽だし。(D)* |

| | | |
|---|---|---|
| | 隠すことでもないと思い伝える | *別に悪いことでも隠すことでもないと思うようになり伝える* |
| | メリットがあると思い伝える | *知ってもらうとコミュニケーションが円滑に進み、自分も楽で伝える* |
| | 伝えるかどうかやタイミングで悩む | *困ったことは、毎回新しい環境に入る時に、自分の難聴のことを打ち明けるか打ち明けないかっていうのが悩みではあります。(B)* |
| | 周囲に伝えていない | *(友達関係には基本的に伝えたことはない？)伝えたことないと思います。(C)* |
| | デメリットと思い伝えない | *身体的欠点・弱みだと捉えており伝えない*<br>*普通に生活できるので、周囲に気を遣わせるのが申し訳なくて伝えない* |
| | 親との会話で話題に上がることがほとんどない | *自分で言うのもなんだけど、しっかりしてた子だったから、聞こえなくても自分で対処できたし、あんま親とそれでコミュニケーションとったりとかしてなかったかもしれないですね。(B)* |
| 周囲からの配慮や支援の経験と求める配慮 | 伝えたけれど配慮がなかった | *俺もなんか、何回か言ったりするんですよね。やっぱり、1回だけだと忘れられる、1回だと、たぶん8割9割くらいで一回目言ったところで忘れられるんですよ。(A)* |
| | 学校での聞き取りやすくするための配慮 | *大学受験、リスニングがあるじゃないですか。で、確かイヤホンつけて、で、私、耳の、まず、イヤホン入らないんで、耳の形的に。なので、それを先生に言ったら、あ、電話してみるよって、それを配慮してもらえたというかっていうのはあります。(C)* |
| | 親からの配慮や助言 | *…小学校 2 年生の時には、もう自分が片耳難聴聞こえないっていうのを知ってて。お母さんからなんか困ることあるの？とかいろいろ聞かれてた。(B)* |
| | 配慮が嬉しかった | *…ご飯食べるときに、どっちだっけって椅子譲ってくれたりとかしたときは、嬉しかったし。」(B)* |
| | 周囲に求める配慮 | *聞こえづらいよねって聞こえやすいほうに移動してくれるだけでありがたいです、小さなことですけど。(A)* |
| | 普通に接してほしい | *もし私が聞こえなかったりとか困っている時に、そういえばそうだったねくらいのテンションでいてもらえればいいかなって思ってて、でも気づいてほしいですね。(B)*<br>*…すっごい過剰反応されて、障害者みたいな扱いされたことあって、それがもうほんとに嫌で、それで言わなくなったっていうのもあるかもしれないですね。(D)* |
| 同じ境遇の人の経験を知る | 同じ境遇の人と経験が共有でき、共感できた | *ネットとかで片耳難聴って調べたら、結構出てきたりするじゃないですか。きこいろを知ったきっかけもネットでググったからなんですけど、そういうので、あー同じような人がいるっていうのを知れただけでも勇気づけられたというか。(A)* |
| | 同じ境遇の人が意外といることを知り、特別なことではないと思えた | *周りに、僕の兄貴の友達だったりとか、あとは部活の後輩だったりとか、意外といて、意外といるんだって思って、で、中には突発性に片耳が難聴になっちゃう人とか、アーティストとか、芸能人とか、なんだ意外といんじゃんみたいな。別に特別なことでもないし、普通に生活できてるし。(D)* |
| 一側性難聴の経験からの学びや人生選択 | 一側性難聴であることを踏まえて進路を模索する | *自分の進路のこととか考えはじめると、働けるのかなみたいな。どういう職業がいいんやろ、とか考えはじめたら、自分の将来の範囲が狭い気がして、それについては、高校時代、特に悩んでたなって記憶はあります。高校時代にその話を先生にしたら、まあ医療職系に就くことは高校の時から考えてたんで、それ言ったら逆に患者さんの気持ちわかるんちゃう？みたいな感じで言ってもらえたりとかしたんですけど。でも、チームで働くってなったら、ちょっとハンディキャップ背負ってるのかなっていうのがあって。(C)* |
| | 一側性難聴での経験から得られた学び | *兄貴が言ってたのは、耳が聞こえる聞こえないっていうのは関係ない、と。やっぱり聞く意思、心の耳がないと、聞けない、聞こえない、と。授業中もスマホ触って聞いてませんでしたっていう人もいるわけで。でも、耳が聞こえない、聞こえにくい人とかは、必死に聞こうとするんですね。しかも、聞こえない人も必死にしゃべろうとするし。自分がいかに伝えたいと思うか、聞こうと思うかっていう心がすごく大事やなって思います。(D)* |

# Experiences of People with Unilateral Hearing Loss

Nodoka Watanabe, Yuchun Yang, Kei Takahashi, Yasuko Shimizu

Abstract
This study aims to explore the experiences of people with unilateral hearing loss and offer insights for healthcare providers on effective support strategies. The authors conducted semi-structured interviews with adults experiencing unilateral hearing loss, and the interviews were recorded verbatim as data. There were four participants, all in their 20s, including two women and two men. The results of the analysis revealed the following seven aspects of their experiences: experiencing and dealing with communication difficulties; self-perception of having unilateral hearing loss; perception of others' ideas of unilateral hearing loss; disclosure of unilateral hearing loss to others; experiences of consideration and support from others and desired assistance; knowing the experiences of others in the same situation; and learning from the experience of unilateral hearing loss and life choices. The results imply that people with unilateral hearing loss have experienced difficulties with communication, and even in situations where there appears to be no disability, casual consideration by those around them can help build smooth communication and other human relationships. At the same time, people with unilateral hearing loss have different self-perceptions of their hearing loss, and it is important to be involved with them while considering their individual perceptions.

Keywords：unilateral hearing loss, experiences, communication, consideration